

---

# 一緒に試着室に入った結果がこれだよ！

シャルロット・デュノアは俺の嫁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一緒に試着室に入った結果がこれだよ！

### 【Nコード】

N8806R

### 【作者名】

シャルロット・デュノアは俺の嫁

### 【あらすじ】

シャルロットと買い物に行った一夏に迫る影

**(前書き)**

初投稿です。

インフィニットストラトスの小説とアニメを混ぜて少しのオリジナ  
ル要素を加えただけの駄作です。というより、駄作にも値しないも  
のになってるかも知れませんが、  
ですが宜しくお願い致します。

「……………」

ここは、1025室。

俺、織斑一夏の朝は  
ここからはじまる。

ふと目がさめた。

”7時45分” そう時計  
は時を刻んでいる

「何故ならなかったんだ」  
そう考えたが理由は  
すぐにわかった。

「ら、ラウラ!?!」

そこにいたのはつい先日  
まで俺のことを敵視  
していた軍隊所属のドイツの代表候補生  
”ラウラ・ボーデヴィツヒ” だった……………。

だが今問題なのは、  
そんなことではない。

問題は2つある。

1つ目は、何故ラウラが裸なのかである。

そして2つ目は、時間だ。

だが、ここで固まっても意味がない。

今は”どうやってこの2問を解決するか”だ。

とりあえずラウラを起こしてみる。

だがなかなか起きないので1人だけ起きることに…。

しかし、ラウラはとても

寝相が悪く

一夏がベッドから

蹴りおとされてしまった。

「いたた……」

「……………」

部屋に一夏の声と

ラウラの寝息が

響きわたる…。

その時！ラウラが一夏の上へと落ちていった。

そしてはラウラの肘が  
一夏に直撃し、深い眠りに一夏も落ちていった…。

ところ変わって剣道場。

箒は日頃から一夏の

ISの訓練を手伝って

いたため剣道の練習を

余りしていなかったのだ。

7時30分現在。

時間なので練習を切り上げ、食堂にむかった。

それから20分後…。

「一夏はどうしたのだ？」

そう感じた箒は一夏のいる1025室へむかう。

「一夏はいるのか？」

「……………」

だか返答はない。

心配に思った箒は

「一夏！…あけるぞ！…！」

と声をかけドアノブに  
手をかけた。

”ガチャ”っと  
ドアノブがまわる。

だが、そこにいたのは  
全裸のラウラと一緒に  
眠っている一夏だった。

みるみるうちに篝の周り  
からドス黒い殺気が  
滲みでた。

しかし流石に元軍隊所属のラウラは異常な殺気に  
目が覚めたらしく  
すかさずISを部分展開し篝の真剣をとめる。

「何故貴様がいるのだ  
ラウラ・ボーデヴィツヒ」  
「夫婦が一緒寝るのは  
当たり前ではないか？」

そして2人の会話でやっと目が覚めた一夏であった。

このあと、篝に殺されそうになる一夏だったがそれはまた別の話で  
ある。

だが、このままでは

授業に間に合わない。

そんな時に通りかかったのはシャルロットだった。

シャルロットはこの日

二度寝をしてしまい

一夏と同様に急いでいた。

一夏がシャルロットに

挨拶をするとシャルロットも一夏に挨拶をした。

だが、箒とラウラは

挨拶もせずに教室へ

走っていった。

それは一夏のクラスの

担任が織斑千冬だからだ。

シャルロットは

シャルロットのISであるラファール・リヴァイブ

カスタム2をすかさず

高速展開させた。

そして、一夏の手を引き

教室まで高速でむかった。

がっ、しかし高速で移動

したために窓ガラスが

大量に砕けた。

その音でなんと千冬にも

窓ガラスを割ったことが



知られてしまった。

「何をしているデュノア？ 校則ではISは闘技場で  
用が許されていない いはずだが？説明しろ！！」

しか使

「あ、え」と……………」

「もういい……………」

織斑とデュノアは

割れたガラスの片付け

をしておくように！！」

「はいつ！！」「は、はあ」

ちなみに最初の返事が

シャルロットで

次が一夏である。

「返事は”はい”だ！！」

馬鹿者」

そう言つて千冬の

アイアンクローが

一夏の頭に炸裂した。

「ぎ、ギヤアアアア」

授業中の学校の中は

とても静かで一夏の叫びがよく響いた。

一夏はアイアンクローを

喰らって気絶してしまったようだ。

なので現在地保健室。

何故か隣から寝息が聞こえる。

その音のほうをむくとシャルロットが眠っている。

どうやら一夏が起きるのを待っていて眠ってしまったたらしく椅子に座ったまま眠っている。

一夏はシャルロットにお礼をするためにシャルロットを起こした。

「おい、シャルロット  
風邪引くぞ」

「はっ！一夏あ？」

と起きるシャルロットだがシャルロットを起こすために一夏がシャルロットに近づいていた。

「えっ？一夏？」

シャルロットは一夏の顔が近すぎて顔が真っ赤になっってしまう。

「シャルロットが看病してくれたんだろ、ありがとうな。あと、日

曜から臨海学校だから水着買いに行かないか？確か水着持ってないっていつてたよな」

「うん！いくよ！！」

突然のデートの誘いに

それだけしか返事が

出来なかった。

まあ、そう考えてたのは

シャルロットだけだが…。

だが、箒やリンの幼なじみを出し抜いたことがとても嬉しかった。

「そうか、じゃあ駅に11時くらいでいいか？」

「うん！わかったよ！！」

そして2人は別れた。

だがこの2人の会話を聞いていた人物が2人いる。

優雅さ、高貴さのある

ブロンド。

躍動感のあるサイドアップツインテール。

ようは、セシリアとリンである。

「なんですのあれ？」

「何かの約束みたいよ」

一夏とシャルロットの  
約束が異常に気になる二人は翌日一夏とシャルロットを追跡するこ  
とにした。

それから3時間後。

一夏は明日の買い物  
待ち合わせに遅れないようもうベッドの中にいた。

一方シャルロットは明日  
のデートが待ち遠しく  
なかなか眠れなかった。

そして出し抜かれたリンとセシリアも明日の一夏とシャルロットの  
約束が気になって眠れなかった。

こうして4人の夜は更けていった。

## 翌日

「ようー！」「おはようー！」

俺は時間に余裕を持って

約束の時間の20分前に

駅に到着した。

シャルロットも約束の時間の10分前に到着した。

「じゃあ集まったから

そろそろ行くか？」

「う、うん！」

こうして電車に

乗り込んだ。

そして2人を追いかける  
2人。

とても凄い行動力である。

「それにしてもシャルロットが普通の呼び名になっちまったな。何か2人だけの呼び名を考えるか？」

「えっ？いいの？じゃあ

お願いしようかな」

「じゃあ、シャルなんて

どうだ？愛着も湧くし

呼びやすい。」

「シャルかあ。シャルね。

うん！凄くいいよ……！」

そんな会話を展開させた。

そして到着。

デパートの水着コーナーにいる2人。

一夏はすんなりと自分の  
着る水着を見つけた。

そして購入。

ここまでの所要時間は約20である。

一夏は買い物が進んだのでシャルロットを見に行く。  
しかし、シャルロットは  
まだ水着を決めてないようだ。

さらにそれどころか考え事をしているようだ。

すると、『はっ！』と  
急に目を見開き水着を2着手にとる。

一夏は「(どうしたんだ)」と思っていた。

だが、シャルロットが一夏の手を引っ張る。

「わっ、わぁ！」

突然シャルロットに引っ張られて、試着室に入らされた。

それはシャルが  
リンとセシリアの尾行に

気がついからである。

同時刻

「ねえ、今一緒に試着室に入らなかった？」

「入りましたわね。」

「よし殺そう!!」「」

一言一句ずれずに意見は合致した。

まさにシンクロ率400%。

どごぞのエ ア?

だがしかし、一夏からして見れば、全く状況を把握できていない。

「(二人に見つかったら  
確実に邪魔されちゃう)」

「なあ、どうして俺達は  
2人で試着室に入っ  
ているんだ？」

問答無用とばかりに  
シャルロットは服を脱ぎ  
始めた。

シユルつと服の繊維同士が擦れあっている音が聞こえる。

「（シャルは何がしたいんだ!?!）」

とりあえず一夏は狭い試着室内でもシャルの裸を見まいとして全力で目をそらした。

一夏としては服の擦れる音で大変ドキドキしている。理性を抑えるのが大変なくらいである。

そして、シャルが着替え終わった。

「いいよ…」

シャルがそう自信のない声で一夏を呼んだ。

一夏がシャルロットの方へ向く。

「似合わないかな？」

一応もう一つあるん

だけど…」

「いやっ！それがいい」

慌てて同意した。

またシャルロットが



着替え始めるのを防ぐためである。

「じゃあ、これにしよう」

「うん！それがいい！！」

こうして無事に水着を  
買うことが決まった。

「じゃ、じゃあ」

急いで試着室から一夏は  
脱出した。

だが判断ミスである。

そこには修羅の顔をした  
セシリアと死神の顔をしたリンがいた。

「一夏あああああ！！」

「一夏さああああん！！」

2人に見つかった一夏はこのあと塵となりました。

B A D E N D

(後書き)

読んで下さった方、誠に有難うございます。  
疲れました…。

一夏って羨ましいですよね。

『たまに一夏タヒね』と考えます。

一夏ファンの人申し訳ありません。

次回作はある魔術の禁書目録を書きたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8806r/>

---

一緒に試着室に入った結果がこれだよ！

2011年4月11日20時57分発行